

[一般論文]

“個人のアイデンティティの水源”としてのアーカイブズ

— 新たなアーカイブズ観を提示する小論 —

土 井 崇 弘

1 “問い”の根源

本稿での問題設定を行うに際して、中京大学社会科学研究所「アーカイブズ研究プロジェクト」における共同研究から導出された“問い”の根源を確認するところから、論を開始しよう。

わが国における「公文書等」の保存管理については、従来、「国民共有の知的資源」という観点での保存・管理にのみ焦点が当てられ、収集・保存の対象は公的機関(特に国および地方公共団体)の文書に限られてきた。だがこの「公文書等」という概念は、当初からその不明確性が指摘されているところであり、この概念が不明確であるがゆえに、「本来、アーカイブズで残されるべきだ」と考えられ得る重要な記録——例えば、戦争や災害の記憶に関する記録——が散逸・廃滅の危機的状况に陥っている。

その原因を探るべく、中京大学社会科学研究所「アーカイブズ研究プロジェクト」が実施した全国各地に存在するアーカイブズの現地調査の結果によれば、現場の担当者は、法律上の「公文書等」に含まれない記録について、「どのような記録を残すべきなのかが分からない」という困惑を、繰り返し表明していた。したがって、法律上の「公文書等」に含まれない記録の適切な収集・保存・管理・利用を実行する際には、「『どのようなタ

イブの記録を残すべきか』という問いに適切に回答しうる、『残すべき記録についての概念特定化』が必要不可欠だ、と考えなければならない。では、残すべき記録をどのように概念特定化するのが適切なのであろうか。

先に「『本来、アーカイブズで残されるべきだ』と考えられ得る重要な記録」の例として言及した、戦争や災害の記憶に関する多数の記録に共通する特徴を抽出するならば、これらの記録は、「個人のアイデンティティ——すなわち、『自分自身は何者であり、どのようなルーツを持つ者であり、どこへ向かおうとしている者なのか』という問いに対する答え——」¹を確定するために、必要不可欠な記録だということができる。したがって中京大学社会科学研究所「アーカイブズ研究プロジェクト」における共同研究では、「アーカイブズで残すべき記録とは、『個人のアイデンティティ記録²』だ」と概念特定化するところから、共同研究を開始した。

2 本稿における問題設定と本稿の構成

それでは、そもそも、アーカイブズで残すべき記録を「個人のアイデンティティ記録」と概念特定化することは、哲学的・理論的見地からみて、なぜ適切かつ有益だと判断できるのであろうか。この“問い”に回答するために、本稿では、まず初めに3で、A・マッキンタイアとR・ベラーらの考えに基づいて、個人のアイデンティティが形成される過程を確認する。次に4で、戦争や災害の記憶に関する記録のような『『本来、残されるべきだ』と考えられ得る重要な記録』を、「個人のアイデンティティ記録」として概念特定化することの適切性・有益性についてまとめたうえで、「“個人のアイデンティティの水源”としてのアーカイブズ」という新たなアーカイブズ観を提示したい。最後に5で、今後の課題について言及する。

3 個人のアイデンティティの形成過程

マッキンタイアは、「埋め込まれた自我 (embedded self)」という自我観を提示し、「人間はすべて、主観的選択を超えるかたちで自身のアイデンティティや自身の今日の状況を定義する歴史的伝統を有しており、『私の人生についての物語は、常に、私のアイデンティティの源である共同体の物語の中に埋め込まれている』（MacIntyre 1984, p. 221 [邦訳 271 頁]）」と考える³。つまり、我々は皆、自身が所属する共同体における具体的な社会的アイデンティティを背負う者として自らの境遇に対応するので、各々の個人にとっての善は、このような社会的アイデンティティを背負い具体的な社会的役割を担う者にとっての善であるに違いない、というわけである。このような彼の考えは、以下に示す有名な著述内容によくあらわれている。

我々は皆、具体的な社会的アイデンティティを背負う者として、自身の環境に接近する。私は誰かの息子あるいは娘であり、別の誰かのいとこあるいはおじである。私はこのあるいはあの都市の市民であり、このあるいはあの同業組合・同業団体の構成員である。私はこの一族、あの部族、この民族に属している。したがって私にとって善いことは、これらの役割の内側に位置を占めている人間にとっての善であるに違いない。そのような者として私は、自身の家族・都市・部族・民族の過去から、様々な負債・遺産・正当な期待と責務を受け継ぐ。これらが私の人生の所与を構成し、私の道徳的な出発点となっている。私の人生に独特の道徳的な特殊性を与えているのは、部分的には、このようなものである。(MacIntyre 1984, p. 220 [邦訳 270 頁])

私が何であるかということは……、重要な部分において、私が何を受け継ぐかということである。(MacIntyre 1984, p. 221 [邦訳 271 頁])

以上で見てきた、個人のアイデンティティが形成される過程をめぐるマッキンタイアの考えは、次のようにまとめることができる。すなわち、個人のアイデンティティ——彼の言葉によると、「私が何であるかということ」——は、その個人が所属する共同体から受け継ぐものに基づいて形成される、と。

また、ベラーらによれば、共同体とは、公的な生活と私的な生活との相互依存関係をよとする包括的な全体であり、個人のアイデンティティが形成される文脈であって、その共同体の過去によって構成されるという意味で歴史を有するものである。それゆえ彼らは、真の共同体とは「記憶の共同体」だと主張する。(Bellah et al. 2008, p. 153 [邦訳 186 頁])

このような、個人のアイデンティティが形成される過程をめぐるベラーらの考えは、次のようにまとめることができる。すなわち、①個人のアイデンティティは、その個人が所属する共同体の文脈において形成され、②個人のアイデンティティが形成される文脈である共同体は、歴史を有する——つまり、過去によって構成される——、「記憶の共同体」である、と。

4 “個人のアイデンティティの水源”としてのアーカイブズ

先に3で確認した、個人のアイデンティティが形成される過程をめぐるマッキンタイアとベラーらの考えに従えば、中京大学社会科学研究所「アーカイブズ研究プロジェクト」における「個人のアイデンティティ記録」の定義——すなわち、「個人のアイデンティティを確定するために必要不可欠な、時を貫く共同体共有の記憶を、記録したもの」——は、極めて妥当かつ適切な定義であったといえる。そして、本稿の注1で言及したテイ

ラーの指摘を踏まえるならば、「私は何者か」という“アイデンティティの問い”に対して適切に答えるためには、「私はどこに位置するのか」「私たちにとって何が決定的に重要であるのか」を理解しておかなければならず、その理解に際して決定的に重要な役割を果たすのが「個人のアイデンティティ記録」なのである。

このように、戦争や災害の記憶に関する記録のような「『本来、アーカイブズで残されるべきだ』と考えられ得る重要な記録」は、個人のアイデンティティを確定させる際に必要不可欠となる、極めて重要な記録だといえることができる。そのような重要性を有する「個人のアイデンティティ記録」を残すという役割を担うアーカイブズという組織・機関は、まさに、“個人のアイデンティティの水源”だといっても過言ではない⁴。

5 今後の課題

以上で見てきたように、本稿では、個人のアイデンティティが形成される過程に検討を加えることで、「個人のアイデンティティの水源」としてのアーカイブズ」という新たなアーカイブズ観を提示した。最後に、筆者にとっての今後の課題について言及することで、本稿を締めくくりたい。

本稿では、①アイデンティティという概念に着目してアーカイブズ論を展開し、②「国家や地域のために記録を残す」という全体主義的・トップダウン的な価値軸と対照的な、「個人のアイデンティティを確定するために必要不可欠な記録を残す」という個人主義的・ボトムアップ的な価値軸に基づくアーカイブズ論を展開してきた。このようなアーカイブズ論の学術的意義はどのように理解されるべきであろうか。この点を検討することを、筆者の今後の課題としたい。

注

- 1 C・テイラーは、「アイデンティティの問いとは『私は何者か』という問いであるが、名前と家系を示せば必ずこれに答えることができるというわけではない」と指摘する。なぜなら、「私たちが本当にこの問いに答えるためには、私たちにとって何が決定的に重要であるかを理解しておかなければならない」(Taylor 1989, p. 27 [邦訳 30 頁]) からである。したがって彼によると、私は何者であるかを知ることは、私がどこに位置するかを知ることの一種である。(Taylor 1989, pp. 27-28 [邦訳 30-31 頁])
- 2 なお、中京大学社会科学研究所「アーカイブズ研究プロジェクト」における共同研究では、「個人のアイデンティティ記録」とは、「個人のアイデンティティを確定するために必要不可欠な、時を貫く共同体共有の記憶を、記録したもの」と定義した。
- 3 もっともマッキンタイアによると、そのような自我観を採用するからといって、自我が、それが埋め込まれた共同体の特殊性に由来する道徳的限界をも受け入れなければならないということにはならない。例えば彼は、自分自身のアイデンティティに対する反抗も、自らのアイデンティティを表現するひとつの可能な様式だという点に、注意を促す。しかしながら、同時に彼は、「人間は、自身の属する道徳的伝統の限界を超える善を探求する際にも、意識して、自らの伝統の内部から自身の善の探求を始めなければならない」ということを強調し、「自身の善を求める個人の探求は、一般的かつ特徴的には、個人の生活がその一部である伝統によって定義される文脈の中で行われる」(MacIntyre 1984, p. 222 [邦訳 273 頁]) ということを指摘する。というも、始点となる何らかの具体的な道徳的伝統を想定しなければ、個人による善の探求を始めるべき地点が、どこにも決して存在しないということになるからである。(MacIntyre 1984, Ch. 15, esp. pp. 220-221 [邦訳第 15 章、特に 269-272 頁])
- 4 ちなみに、「“個人のアイデンティティの水源”としてのアーカイブズ」という新たなアーカイブズ観を提示する際に、示唆的だと思われるのが、以下に挙げるベラーらの著述内容である。

私たちを過去に結びつける記憶の共同体は、また私たちに未来へと目を向けさせる希望の共同体でもある。希望の共同体は、私たちが自分や自分に身近な者ために抱いた願いを広い全体の願いへと結びつけることを可能にし、自分の努力をいくらかは共同善への貢献という視点から見ることを可能にするような、意味の文脈を用意する。(Bellah et al. 2008, p. 153 [邦訳 187 頁])

参考文献

- Bellah, R.N. et al. 2008 *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, With a New Preface, University of California Press [島藺進、中村圭志 共訳『心の習慣——アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房、1991年]
- MacIntyre, A. 1984 *After Virtue: A Study in Moral Theory*, Second Edition, University of Notre Dame Press [篠崎榮訳『美德なき時代』みすず書房、1993年]
- Taylor, C. 1989 *Sources of the Self: The Making of the Modern Identity*, Harvard U. P. [下川潔、桜井徹、田中智彦 訳『自我の源泉——近代的アイデンティティの形成』名古屋大学出版会、2010年]